

世界に広がる助け合いの輪

松山市立味生第二小学校 担当教科/全教科(理・音除く)

鼻崎 吉則

●実践教科:社会・学級活動・道徳 ●時間数:4時間 ●対象学年:小学6年生 ●対象人数:自学級35名(6年生105名)

授業実践のねらい

- 様々な資料からモンゴルの文化や風習のあらましについて知り、モンゴルに関心をもつ。
- モンゴルと日本の文化や生活の違いに注目し、異文化や基本的人権についての理解を深める。
- 外国の人々とも支え合っていることに気付き、日本人としての自覚をもって世界の人々と親善に努めようとする心情を育てる。

授業実践の構成

時間	テーマ・ねらい	主な学習活動	使用教材等
第1時 ～ 第2時	モンゴルって どんな国?	<ul style="list-style-type: none"> ・〇×クイズにグループで答える。 ・写真や実物を紹介しながら答えを確認する。 ・感想を書き、話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ワークシート① ○パワーポイント ○世界地図 ○馬頭琴 ○羊の骨のおもちゃ(シャガイ) ○スーテーツアイ ○ゲルの模型 ○CD
第3時	あっていい『ちがい』、 なくしたい『ちがい』	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の大切なものについて話し合う。 ・写真を見て「あっていい」「なくしたい」「どちらともいえない」のいずれかに分類し、その理由をワークシートに書き、全員で話し合う。 ・感想と自分の大切なものを書き、話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○拡大写真 ・モンゴル相撲 ・ゲル ・水を運ぶ子ども ・マンホールチルドレン ○ワークシート②
第4時	モンゴルとのかけ橋	<ul style="list-style-type: none"> ・写真を見て話し合う。 ・資料の内容を聞き、話し合う。 ・青年海外協力隊OGの話聞く。 ・感想を書き、話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○拡大写真 ・マンホールチルドレン ・戦時中の様子を描いた壁画 ・火力発電所 ○世界地図 ○ワークシート③

授業の詳細

第1～2時 モンゴルってどんな国?(社会科)

単元の導入として、児童が興味をもってモンゴルへの理解を深められるように、〇×クイズを行った。その際、一人一人が友達と相談しながら答えを推理できるよう、グループで取り組ませた。教師が撮影してきた写真を見る、羊の骨のおもちゃ(シャガイ)や馬頭琴などの実物に触れる、CDを聴く、スーテーツアイを飲んでみるなど、実際に体験したりしながら答えを確認した。

この服、とても温かいよ!

ゲルは組み立てがしやすく造られているんだね。

人口よりも家畜の方がすっと多いなんて!

羊の骨って、こんな使い方ができるのか。

このしょっぱさが、くせになる!?

人口:約279万5800人
ヒツジ:1168万頭
ヤギ:1223万頭
ウシ:184万頭
ウマ:200万頭
ラクダ:25万頭
家畜の合計:2800万頭(人口の10倍以上)
放牧地...国土の80%
遊牧

児童の反応

- モンゴルと日本は、いろいろな面が違っていることが分かった。
- 日本に比べると暮らしが安定していないけれど、モンゴルの人は工夫して生きているんだと思った。
- もっとモンゴルのことを知りたい。

【所感】

クイズでは、「モンゴルには海がないのに、なんで塩が採れるの?」など、答えを聞いて自分たちが常識だと思っていたことが覆され、驚いている児童が多かった。また、見る・聴く・触れる・味わう・嗅ぐという五感を使う体験を取り入れたことで、楽しみながら学習し、モンゴルへの関心を高めることができた。終末ではマンホールチルドレンを紹介し、モンゴルは貧困といった社会問題を抱えていることに気付かせ、次時へとつなげた。

第3時 あっていい「ちがい」、なくしたい「ちがい」(学級活動)

人権参観日の授業として実施。「モンゴル相撲」「ゲル」「水を運ぶ子ども」「マンホールチルドレン」の写真を提示して自分たちの生活や文化と比較しながら違いに注目させ、「あっていい」「なくしたい」「どちらともいえない」のいずれかに分類し、その理由について全員で話し合った。終末では、改めて自分にとって大切なものは何かを考えた。

モンゴル相撲



- 児童の意見**
- 【あつていい……31名】**
- ・おもしろそう。
 - ・モンゴルの伝統だから。
 - ・その国の個性を感じる。
 - ・国ごとで違う楽しさがある。
- 【なくしたい……0名】**
- 【どちらともいえない……4名】**
- ・危なそう。

ゲル



- 児童の意見**
- 【あつていい……23名】**
- ・モンゴルの環境や暮らしに合わせて、無駄なく造られている。
 - ・モンゴルのシンボル。
- 【なくしたい……4名】**
- ・もっと快適な方がいい。
- 【どちらともいえない……8名】**
- ・日本人にとっては不便だけど、モンゴルの人にとっては普通だろうから。

水を運ぶ子ども



- 児童の意見**
- 【あつていい……0名】**
- 【なくしたい……26名】**
- ・つらそうな顔をしている。
 - ・子どもがやるべきじゃない。
 - ・命にも関わるから、水道は必要。
- 【どちらともいえない……9名】**
- ・この子たちは、これを当たり前だと思って生活しているのでは。
 - ・水道は必要だけど、造るのにすごくお金がかかりそう。

マンホールチルドレン



- 児童の意見**
- 【あつていい……0名】**
- 【なくしたい……30名】**
- ・とても寒いのに、家がなくてかわいそう。
 - ・家族と暮らせなくて、寂しいと思う。
 - ・マンホールで暮らさないといけないこと自体が、おかしい。
- 【どちらともいえない……5名】**
- ・あつていいとは思わないけど、どうすればなくせるのか分からない。

児童の反応

- 私たちが当たり前に行っていたことが、モンゴルでは当たり前じゃなくて苦しんでいる人もいることが分かった。
- モンゴル相撲など、文化の違いなどで楽しめるのはすごくよいことだと思う。けれども、マンホールチルドレンは、私たちと同じくらいの年なのに帰る家もなくて、温かくも暮らせないので、その違いはなくていった方がよいと思う。

○モンゴルの伝統は守り続けてほしいけれど、子どもに働かせることを当たり前とは思ってほしくない。周りの人たちが環境が変わると、このような子どもたちも減ると思う。

【自分にとって大切なもの】(授業後)

- ① 家族(28名) ② 友達(16名) ③ 命(14名) ④ 家、食料(各6名)
- ・お金 ・スポーツ ・思い出の品 ・本 ・歌 ・知識 ・目標 など……

【所感】

前時に、児童は日本とモンゴルとの間にはいろいろな違いがあることに気付いた。本時では、そうした違いの中でも、国や文化の個性として認められるものと、人間が人間らしく生きていくために認めてはならないものがあることに気付けるよう、授業を構成した。水を運ぶ子どもやマンホールチルドレンの写真を見て、自分と同じくらいの年齢の子どもが苦しい環境にあることを知り、児童は自身と重ね合わせて考えることができていた。話し合いの中では、社会的な背景にまで目を向けて「マンホールチルドレンはあつていいとは思わないけれど、いろいろな事情があるし、どうすればなくせるか分からない。」といった意見もあった。しかし、自分自身の「思い」としてはどうかと投げかけると、マンホールチルドレンはなくしたいという意見で全員一致した。授業の冒頭で「自分にとって大切なものは?」と聞かれ所有物ばかりを挙げていた児童も、終末で再度聞かれたときには「家族」「友達」など、自分の生き方に根ざすものを挙げるようになった。やや重い内容ではあったが、実践の意義を実感できた。

第4時 モンゴルとのかけ橋(道徳)

児童が外国の人々とも支え合って生きていることに気づき、日本人としての自覚をもって世界の人々と親善に努めようとする心情を育てるために、東日本大震災発生直後の日本に対するモンゴルからの支援を題材として資料を自作した。

1. 写真を見て話し合う。

○マンホールチルドレンはどんな思いで生活しているのだろう。



- ・温かくて安心して暮らせる場所に住みたい。
- ・食べるものもなくて、つらい。

○モンゴルの人は日本のことをどう思っていたのだろう。



- ・戦争中の様子で、日の丸を踏んで握手している人が描かれている。
- ・戦争がきっかけで、モンゴルの人は日本のことを嫌っているようだ。

2. 資料の前半を聞き、話し合う。

(前略)モンゴルの人々は、地震発生のニュースが駆け巡ると、すぐに日本に向けての義援金や支援物資を集める呼びかけを始めました。中には、1日分の給料を全部寄付した役所や会社もあったそうです。(中略)モンゴルの至る所で、日本のために行動を起こしてくれた人がいたのです。そうして、日本円で2億5千万円を超える義援金がわずか数日のうちに集められました。支援はお金だけではありません。温かい毛布など、被災地ですぐに必要とされる物資を、どんな国よりも早く、届けてくれました。

食べるものや住む場所に困っている人も多いモンゴル。また、過去の戦争で日本のことを嫌う人も多かったというのに、どうしてモンゴルの人々は日本を支援したのでしょうか。

○日本人はどんな思いで世界の国々への支援を行っているのだろう。

自分たちの生活が苦しいのに、他の国のことを助けることなんて本当にできるのかな。



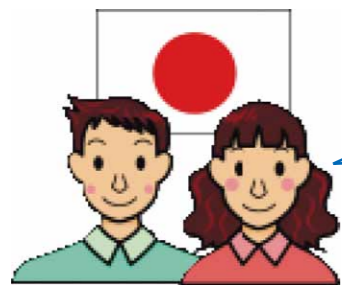
苦しい生活をしている人の気持ちが分かるから、支援したんじゃないかな。

3. 資料の続きを聞き、話し合う。

20年ほど前まで、モンゴルは今のロシアと協力関係にありました。しかし、社会体制の変化をきっかけに、ロシアからの支援が突然なくなってしまったのです。そのために、火力発電所の建設が中断されてしまいました。寒さの厳しいモンゴルです。火力発電所がないと凍えてしまいます。しかし自分たちの力ではもう造ることができない…。さらに追い打ちをかけて、食料の不足も深刻でした。

そんなとき、日本はモンゴルに対して手を差し伸べたのです。建設途中だった発電所も無事完成し、食料の危機もしのぐことができました。そしてモンゴルに対する支援は、今も続いています。実は、日本が支援を行っているのはモンゴルだけではありません。世界中の、貧困などで苦しんでいる国々に対しても支援をしているのです。日本人はどんな思いで世界の国々に対して支援を行っているのでしょうか。

○日本人はどんな思いで世界の国々への支援を行っているのだろう。



- ・他の国の役に立ちたい、がんばりたい。
- ・困っている人を助けるのは当たり前。
- ・日本は平和な国で、そのありがたさを他の国の人にも実感してほしい。
- ・世界中の人たちが、みんな楽しく暮らせる世界にしたい。
- ・国と国が助け合って、信頼関係をつくりたい。

4. 青年海外協力隊OG(横内悠さん)の話を聞く。

私は、ベリーズという国で体育を教えるボランティアをしました。ベリーズの人たちは、私がいろいろな運動を紹介すると、とても喜んでくれました。自分の得意なことが、他の国の人の役に立つことができるのだと実感できて嬉しかったです。ボランティアを通して、たくさんの人の笑顔を見ることができました。いろいろな国の人が、笑顔になればいいなと思っています。

帰国後、震災のニュースを聞いたベリーズの人たちが心配して、たくさんの連絡がありました。遠く離れていても心配し合える関係をつくることで、世界は一つなんだと実感することができました。



児童の反応

- 震災のときの支援のことを知って、やっぱり国と国とは助け合えないといけないと思った。
- 国と国は戦争もするけれど、助け合いもしていることが分かった。
- 支援の仕方はいろいろあるんだと分かった。
- 今までは、募金をするときにその人たちの気持ちを考えていなかったけれど、これからは気持ちを考えて支えになりたい。
- これまで日本と他の国との関係を考えてことがなかった。遠く離れた国同士でも心配し合えるのはすごいし、何より素敵なことだと思う。
- これからは「国と国」ではなく「人と人」がつながり合える関係を築いていくことが大事なんだと実感した。
- 他の国との交流も「キャッチボール」だと思った。投げたら捕ってくれて、また投げられる。支援したら受け止めてくれる、そして日本にも支援してくれる。「キャッチボール」は大切だと思った。

【所感】

モンゴルでの研修中に私が最も感動し、印象に残ったのが、東日本大震災発生後にモンゴルから温かい支援を受けていたという事実であった。この感動を伝えるとともに、児童の中に外国の人と支え合っていこうという気持ちを育てたいと思い、本時を総合単元を中心と捉えて実践した。道徳の授業として、児童が自分自身に重ね合せて葛藤したり自分を見つめ直したりできるよう、資料や発問は何度も見直しを行った。また、日本とモンゴルとの話に留めるべきかとも考えたが、日本が世界中の国々に支援を行っているということから自国に対する誇り感させたいと思い、本時の展開に至った。「日本人はどんな思いで世界の国々への支援を行っているのだろう。」という中心発問では、児童が話し合ったことに対する答えとして横内さんの話を位置付けた。自分たちが考えたことと、実際にボランティアとして活動したことのある人との考えが一致したことで、児童は自信をもつことができた。最後に感想を書くスピードが速まったことが、横内さんの話のインパクトの強さを物語っていた。やはり、本物の体験をした人の言葉は心にぐっとしみ通るものがある。

「国と国」との関係性から「個人」としての思考につなげることの難しさを感じた授業であった。しかし、自分の思いを自作の資料に乗せて伝えることができ、教師としても非常に挑み甲斐のある実践となった。

授業実践を終えて(成果と課題)

授業を始めるにあたって「モンゴルといえば?」と尋ねたところ、児童から返ってきたのは「朝青龍」という答えが多かった。名前を聞いたことはあっても、どんな国なのかは全く分からないという状態からのスタートであった。そもそも、日常生活の中で外国とのつながりを実感すること自体、児童にとってはほとんどないことである。だからこそ、驚きや感動を伴って様々な事象に出会えるよう、写真や現物などの教材を積極的に活用するようにした。こうした体験を通して純粋な興味や関心を喚起したことが、学習をする上での大きな動機付けになったように感じる。

帰国直後、そして授業の実践中、私は現地で見たと聞いたこと、感じたことを伝えたいという思いでいっぱいだった。その結果、全般的に教師が伝えることの多い授業になってしまった。子どもの実態や発達段階に応じて伝えたいことの要素を絞り込み、シンプルな単元・授業構成をする必要を感じた。

本実践は様々な教科等を横断した内容となった。国際理解教育は、違う国の実態を知る「知」の面と、人間同士の関わり合いについて考える「情」の面が両輪になっていると考える。また、見方によって多様な解釈をすることができるので、知れば知るほど学びの幅が広がっていく。したがって、限られた一時間一時間ですべてを伝えようとするのではなく、様々な場面でじっくりと時間をかけながら紡いでいくべき性質のものであることを改めて実感した。

本実践を通して、特に小学校における国際理解教育の目指すところは、児童がその国のことを「分かる」状態にするよりも「おもしろそう」「何でだろう」「もっと知りたい」など、海の外に向けて子どもが心を開く状態へと導くことなのだと考えるようになった。今後も、各教科等に内在する要素をしっかりと捉えて長期的な指導計画を立てたり、日常的な働きかけを続けたりしながら、引き続き実践を行っていきたい。

使用教材

【ワークシート① ○×クイズ】

QUIZ the モンゴル

★ クイズを通して、モンゴルのマニアになろう!

番号	問題	自分の考え	正解
1	モンゴルと日本、面積が大きいのは日本である。		
2	モンゴルの人は引っ越しをしない。		
3	モンゴルでは、国全体の人口と家畜(羊・やぎ・馬・牛・ラクダ)の合計とでは、人口の方が多い。【人口は約270万人】		
4	首都・ウランバートルの人口は、モンゴルの全人口の約20%である。【日本の場合、東京の人口は日本の全人口の約10%】		
5	モンゴルでよく飲まれているミルクティーは「塩味」である。		
6	モンゴルにも「すもう」がある。		
7	モンゴルでは「魚の骨」がおもちゃとして子どもたちに親しまれている。		
8	モンゴルの学校と日本の学校、夏休みが長いのは日本の学校である。		
9	ウランバートルは、世界の首都で最も暑い。		
10	モンゴルにはマンホールで暮らす子どもたちがいる。		

★ 発見したこと・感じたこと

【ワークシート② ちがいをWS】

写真を見て、あつていい「ちがいが」や無くしたい「ちがいが」について考えよう。

写真	自分への問い	自分への問い	自分への問い	自分への問い
	あつていい なくしたい どちらともいえない	あつていい なくしたい どちらともいえない	あつていい なくしたい どちらともいえない	あつていい なくしたい どちらともいえない
理由				

<学習を通して感じたこと>

【ワークシート③】

「モンゴルについて」

【資料「モンゴルとのかけ橋」】

資料「モンゴルとのかけ橋」

2011年3月11日。その日、東日本大震災が起きました。観測史上最大級の地震、そして大津波が街を襲い、人々の穏やかな暮らしを丸ごと飲み込んでしまいました。死者・行方不明者は約2万人にものぼると言われています。あれから8か月……。被災地の人々は現在もなお大変な生活を送っており、復興に向けて様々な取組がなされています。

東日本大震災発生時のニュースは、全世界に伝えられました。モンゴルの人々は、地震発生時のニュースが駆け巡ると、すぐに日本に向けての義援金や支援物資を集める呼びかけを始めました。中には、1日分の給料を全部寄付した役所や会社もあったそうです。ある人は、30km離れた場所から馬に乗って義援金をもってきました。またある所では、日本人だと知って料金を取らなかったタクシー運転手もいました。モンゴルの至る所で、日本のために行動を起こしてくれた人がいたのです。そして、日本円で2億5千万円を超える義援金がわずか数日のうちに集められました。支援はお金だけではなく、温かい毛布など、被災地ですぐにも必要とされる物資を、どんな国よりも早く届けてくれました。

食べるものや住む場所に困っている人も多いモンゴル。また、過去の戦争で日本のことを嫌う人も多かったというのに、どうしてモンゴルの人々は日本を支援したのでしょうか。

20年ほど前まで、モンゴルは今のロシアと協力関係にありました。しかし、社会体制の変化をきっかけに、ロシアからの支援が突然なくなってしまったのです。そのために、火力発電所の建設が中断されてしまいました。寒さの厳しいモンゴルです。火力発電所がないと凍えてしまいます。しかし自分たちの力ではもう進ることができない……。さらに追い打ちをかけて、食料の不足も深刻でした。

そんなとき、日本はモンゴルに対して手を差し伸べたのです。建設途中だった発電所も無事完成し、食料の危機もしのぐことができました。そしてモンゴルに対する支援は、今も続いています。

実は、日本が支援を行っているのはモンゴルだけではなく、世界中の、貧困などで苦しんでいる国々に対しても支援をしているのです。日本人はどんな思いで世界の国々に対して支援を行っているのでしょうか。

参考文献

・地球の歩き方編集室(2011)「地球の歩き方 モンゴル」 ダイヤモンド社

二岡 幸

角野 由佳

鼻崎 吉則

川原 恵子

足立 さち

井上 省吾